

## <異説>ウガヤ王朝:上記(うえつふみ)文書

日本書紀の年代と、上つ記(うえつふみ)文書は、関連している。

(※「上つ記」は江戸時代の偽作とされるが、ここでは年代考証として「上つ紀(うえつき)」と記す。)

日本書紀では、神武即位を紀元前660年としたが、書記の復元結果は、紀元後61年が正しい。

この間、720年が引き延ばされて、関連する王族(=豪族)は空位となってしまう。

これを代位1人=10年間とすれば、72人=720年となる。

(※ウガヤ王族の始祖から720年後に神武即位。)

「上つ紀」は、日本書紀を参考に、紀元前660年を出発点(=3倍引き延ばし)としたと考えられる。

「上つ紀」では、ウガヤ王朝の73代目が神倭朝(カムヤマト)初代:神武(磐余彦)となっている。

さらに74代目が大神倭(大磐余彦)として、「九州王朝」から「大和王朝」へ王朝遷都と見なしている。



### <参照> 竹内文獻



<疑問> 記紀では、瓊瓊杵尊の子が火遠理。火遠理の子が、鵜葺草葺不合である。

上つ紀の歴代では、神倭朝1代(狭野尊)、74代(磐余彦尊)を、別人(\*)と解釈している。

・73代⇒74代:大倭(=大和)に遷都の意味だろうか?

※「火火出見」を神湊名川耳(2代:綏靖)とすると、狭野尊とは、「別系統」とみなす説もある。

### 代位

磐余彦の兄:五瀬尊を天皇に数えていることから、直系でなく、兄弟親族を代位としている。

兄弟親族数を直系数の5倍とすると、元年から更に10代位まで遡るのではなかろうか。

・或いは書記の引延ばし年数に対応させたのだろうか?

## <参照 wiki>ウガヤ王朝 <竹内文献・ウエツフミ>歴代の一覧

[竹内文書](#)より ( )内のカタカナはウエツフミより

- 55代から68代までは『ウエツフミ』では原本が散逸してしまい本文が存在していない。

- 1代 **武鷲草葺不合 身光天津日嗣天日天皇**
- 2代 **日高日子身光天日天皇 軽島彦尊 (不明)**
- 3代 **真白玉輝彦 天日天皇 (マシラタママカガヒコ)**
- 4代 **玉嚙尊 天津日嗣天日天皇 (タマカミヒコ)**
- 5代 **天地明成赤珠彦 天日身光天皇 (アメツチアカリナスアカタマヒコ)**
- 6代 **石鉾齒並執楯天皇 天日天皇身光天皇 (イワホコハナメトリタチ)**
- 7代 **櫛豊媛尊 天日身光媛天皇 (クシトヨヒメ)**
- 8代 **光徹笑勢媛天皇 天日身光媛天皇 (ヒカリトルワラワセヒメ)**
- 9代 **千種媛天皇 天日身光媛天皇 (チグサヒメ)**
- 10代 **千足媛天皇 天日身光万国棟梁天皇 (チタラシヒメ)**
- 11代 **禍斬劔彦天皇 天日身光万国棟梁天皇 (マガキルツルギヒコ)**
- 12代 **弥広殿作天皇 天日身光天皇 (ヤヒロトノツクリヒコ)**
- 13代 **豊明罔押彦天皇 天日身光天皇 (トヨアカリクニオシヒコ)**
- 14代 **火之進奇猿媛天皇 天日身光天皇 (ホノスセリクシマシラヒメ)**
- 15代 **臼杵天皇 天日身光天皇 (ウスキネヒコ)**
- 16代 **産門真幸天皇 天日身光天皇 (ウブドマサキ)**
- 17代 **表照明媛天皇 天日身光天皇 (ウワテルアカリヒメ)**
- 18代 **依細里媛天皇 天日身光天皇 (ヨザミサトヒメ)**
- 19代 **少名形男彦天皇 天日身光天皇 (スクナガタオ)**
- 20代 **天津明少名大汝彦天皇 天日身光天皇 (アマツミノリスクナオオナヒコ)**
- 21代 **天饒明立天皇 天日身光天皇 (アメニギシアカリタチ)**
- 22代 **天押開神魂彦天皇 天日身光天皇 (アメオシヒラキカムタマヒコ)**
- 23代 **天饒国饒狭真都国足天皇 天日身光天皇 (アメニギシクニニギンサマツクニタラシ)**
- 24代 **天饒国饒黒浜彦天皇 天日身光天皇 (クロハマヒコ)**
- 25代 **富秋足中置天皇 天日身光天皇 (トミアキタラシナカオキ)**
- 26代 **種浙彦天皇 天日身光天皇 (タネカシヒコ)**
- 27代 **建玉天皇 天日身光天皇 (タケタマヒコ)**
- 28代 **天之海童楽之雄天皇 天日身光天皇 (アメノイソリエラギノオ)**
- 29代 **神豊実媛天皇 天日身光天皇 (カムトヨミヒメ)**
- 30代 **円脊之男天皇 天日身光天皇 (マロセノオ)**
- 31代 **橘媛天皇 天日身光天皇 (タチバナヒメ)**
- 32代 **花撰媛天皇 天日身光天皇 (ハナヨリヒメ)**
- 33代 **清之宮媛天皇 天日身光天皇 (スガノミヤヒメ)**
- 34代 **八千尾亀之男天皇 天日身光天皇 (ヤチオカメオノオ)**
- 35代 **花媛天皇 天日身光天皇 (ハナヒメ)**
- 36代 **若照彦天皇 天日身光天皇 (ワカテルヒコ)**
- 37代 **松照彦天皇 天日身光天皇 (マツテルヒコ)**

- 38代 天津太詞子天皇 天日身光天皇 (アマツフトノリトヒコ)  
39代 神足伊足彦天皇 天日身光天皇 (カムタラシイタラシヒコ)  
40代 神楯媛天皇 天日身光天皇 (カムタテヒメ)  
41代 神楯広幡八十足彦天皇 天日身光天皇 (カムタテヒロハタヤソタラシヒコ)  
42代 鶴舞媛天皇 天日身光天皇 (ツルマキヒメ)  
43代 豊足大御中天皇 天日身光天皇 (トヨタラシオオミナカ)  
44代 大炊氣吹天皇 天日身光天皇 (オオカシキイブキ)  
45代 空津争鳥天皇 天日嗣天皇 (ソラツアラソキカラスタケ)  
46代 鳥言足清男天皇 天日嗣天皇 (カラスコトタリスガオ)  
47代 大庭足媛天皇 天日嗣天皇 (オオニワタラシヒメ)  
48代 豊津神足別天皇 天日嗣天皇 (トヨツカムタラシワケ)  
49代 豊足彦天皇 天日嗣天皇 (トヨタラシヒコ)  
50代 神足別国押之女天皇 天日嗣天皇 (カムタラシワケクニオシヒメ)  
51代 国押別神足日天皇 天日嗣天皇 (クニオシワケカムタラシ)  
52代 天津紅之枝玉天皇 天日嗣天皇 (アマツホノエタマヒコ)  
53代 天開明知国東天皇 天日嗣天皇 (アメヒラキアカリシリクニツカ)  
54代 高天原輝徹国知天皇 天日嗣天皇 (タカマノハラカカリトオルクニシリ)  
55代 天津玉柏彦天皇 天日嗣天皇 (【欠落】アマツタマカシハヒコ?)  
56代 天津成瀬男天皇 天日嗣天皇 (【欠落】アマツナルセノヲ?)  
57代 天津照雄之男天皇 天日嗣天皇 (【欠落】アマツテルヲノヲ?)  
58代 御中主幸玉天皇 天日嗣天皇 (【欠落】ミナカヌシサキタマ?)  
59代 天地明玉主照天皇 天日嗣天皇 (【欠落】アメツチアカルタマヌシテル?)  
60代 天照櫛豊媛天皇 天日嗣天皇 (【欠落】アマテラスクシトヨヒメ?)  
61代 豊足日明媛天皇 天日嗣天皇 (【欠落】トヨタラシヒノアカルヒメ?)  
62代 天豊足別彦天皇 天日嗣天皇 (【欠落】アマツトヨタラシワケヒコ?)  
63代 事代国守高彦尊天皇 天日嗣天皇 (【欠落】コトシロクニモリタカヒコ?)  
64代 豊日豊足彦天皇 天日嗣天皇 (【欠落】トヨヒトヨタラシヒコ?)  
65代 勝勝雄之男天皇 天日嗣天皇 (【欠落】カチカツヲノヲ?)  
66代 豊柏木幸手男彦天皇 天日嗣天皇 (【欠落】トヨカシハギサチテヲヒコ?)  
67代 春建日媛天皇 天日嗣天皇 (【欠落】ハルタケヒヒメ?)  
68代 天津日高日子宗像彦天皇 天日嗣天皇 (【欠落】ムナカタヒコ?)  
69代 神足別豊耜天皇 天日嗣天皇 (カムタラシワケトヨスキ)  
70代 神心伝物部建天皇 天日嗣天皇 (カムコロヅテモノベタケ)  
71代 天照国照日子百日白杵天皇 天日嗣天皇 (アマテルクニテルヒコモモカヒウスキ)  
72代 彦五瀬天皇 天日嗣天皇 (オオワダツヒコイツセ)

## 神倭朝

- 1代 狭野尊 天日嗣天皇 (=73代 カムヤマトイワレヒコ、幼名ヒタカサヌ)  
74代 神大倭大磐余彦 火々出見命 (『ウエツフミ』にだけ記述がある、幼名カムヌナガワミ)

---

(注) 文字色付けは、参照文献とは無関係。特異な名称を着色してみた。天皇と呼ぶには根拠に乏しい。

## <参照>概説『(Wikipedia)』

『ウエツフミ』『竹内文献』『神伝上代天皇紀』などの古史古伝に記載されている神武天皇以前の古代王朝で、火々出見命の子鵜萱葺不合命が開いた王朝とされる。

鵜萱葺不合命は、『古事記』、『日本書紀』の中では、神武天皇の父とされている<sup>[1]</sup>。『ウエツフミ』、『竹内文献』、『神伝上代天皇紀』などの中では神武以前に何代か続いた王朝の始祖とされている。しかし、これらの文書の中でも天皇の数や王朝の継続期間は一致していない。そもそもこれらの文書は史料価値が認められておらず、ウガヤフキアエズ王朝とは近代以降に偽作された架空の王朝だとするのが妥当であるとされている。

具体的な内容は、『ウエツフミ』『竹内文献』によるウガヤ朝、「宮下文書」によるウガヤ朝、『上代天皇紀』によるウガヤ朝と、大きく三系統に分かれる。誤解が広まっているが、「**九鬼文書**」にはウガヤ朝についての詳細な記述はない。

本来は「ウガヤ朝」という言葉はなかった。「竹内文献」では「不合朝」（あえずちょう）とよび、「富士宮下文書」では「宇家潤不二合須国世」（うがやふじあわすのくにのよ）などという。

「ウガヤ朝」という言葉を広めたのは吾郷清彦である。昔は、神話にでてくるニニギ・ホホデミ・ウガヤフキアエズの親子三代を、神武朝とか仁徳朝とか天武朝とか桓武朝などのような言葉と同じような意味でニニギ朝・ホホデミ朝・ウガヤフキアエズ朝といい、この三代をあわせて「高千穂三朝」（日向三代）といていた。はじめ、吾郷清彦はこのようつもりでウガヤフキアエズ朝を略して「ウガヤ朝」といていた。これを「ウガヤ王朝」と書いて、あたかも皇室とは別の古代王朝が存在したかのような紛らわしい表現を提案したのは別の歴史本ライターである。

『ウエツフミ』によると、祖母山に天孫降臨したニニギの命は、この山の周辺に最初の都「二上(ふたのぼり)の大宮」を建設し、そこから大野川を下って大分市内の南大分あたりに「大分(おおきた)の宮」を構えて首都とし、現在の霊山(りょうぜん)に八咫鏡を祀る社を建てたとある。その孫である初代・ウガヤフキアエズの命の時代には、この地からタケルと呼ばれる国司を任命して、ほぼ全国を統治しており、その地名と実際に任命された人物名までが正確に記録されている。

## <参照>上紀『(Wikipedia)』

『上記』(うえつふみ)は、いわゆる古史古伝と呼ばれる文書の一つであり、一般に偽書とされる。ウガヤフキアエズ王朝を含む古代日本の「歴史」などが豊国文字で書かれている。

1837年(天保8年)に豊後国(現在の大分県)で発見された。『上記』、『上津文』、『上つ文』、『ウエツフミ』とも書き、『大友文献』、『大友文書』などともいう。神代文字の一種である豊国文字で記されている。

『上記』の序文には、1223年(貞応2年)に源頼朝の落胤とも伝えられている豊後国守護の大友能直が、『新はりの記』や『高千穂宮司家文』等の古文書をもとに編纂したとあるが、一般に史実とはみなされていない。

内容は、ウガヤフキアエズ王朝に始まる神武天皇以前の歴史や、天文学、暦学、医学、農業・漁業・冶金等の産業技術、民話、民俗等についての記事を含む博物誌的なものである。

例えば『上記』によると、神武天皇はウガヤフキアエズ王朝の第73代であり、中国に農業や文字を伝えたのは日本であり、日本では精密な独自の太陽暦があったことなどが記されている。

現存する『上記』の写本には、宗像本系と大友本系との2つの系列がある。

宗像本とは、豊後国大野郡土師村(現在の大分県豊後大野市大野地区)の宗像家に伝えられていた古文書を、国学者幸松葉枝尺(さちまつ はえさか)が筆写したものである。

大友本とは、豊後国海部郡臼杵福良村(現在の大分県臼杵市福良)の旧家大友家に伝わっていた写本である。

■ウガヤフキアエズ王朝：弥生時代に大分に実在したウガヤフキアエズ王朝！



大和王朝が成立する前に、大分を中心に、ウガヤフキアエズ王朝が存在していた！

別名、「豊国王朝」、「日向王朝」、「高千穂王朝」とも呼ばれる。

『上記（ウエツフミ）』という豊国文字で書かれた謎の古文書。その記述によると、大和王朝が成立する前の、弥生時代、豊の国・大分を中心に、『ウガヤフキアエズ王朝』が存在し、少なくとも74代にわたり繁栄した、と書かれている。ニニギの命は祖母山に天孫降臨し、その孫である初代・ウガヤフキアエズの命は、大分の地からほぼ全国を統一して、各国ごとにタケルと呼ばれる領主を任命していた。そして、その勢力範囲は、遠く中国大陸や朝鮮半島にまで及んでいたのである。しかし、この王朝は何者かにより滅ぼされ、その記録も抹消された。

▼なぜ「実在しなかった」という説が有力なのか？

それは、大和朝廷の成立と関係があります。ウガヤ朝が存在したのが、おおよそ B.C.1000 年頃から A.D.300 年頃の間です。なぜ、そんなに正確に分かったのかというと、ウエツフミには天文に関する正確な記述が含まれているからです。五島プラネタリウムの金井三男氏が分析した結果、この「ウエツフミ」の星辰伝承は、「紀元前 8 百年から同千年頃の間」に成立したことは間違いない。」と結論づけています。

そして、A.D.150 年頃に発生した「異常気象＝世界的な寒冷化」により、九州地方を大飢饉が襲い、これが理由でウガヤフキアエズ王朝は、九州を離れ奈良県の吉野山に遷都します。（のちに神武東征と呼ばれる）

その後、倭国大乱が発生し、ウガヤフキアエズ王朝は第 74 代で滅んでしまいます。（これ以降の記録が無い）

さらに、A.D.200 年～300 年頃、第 12 代景行天皇が大分にやってきて、奥豊後の地に残っていたウガヤフキアエズ王朝の末裔たちを一掃しています。その経緯は『日本書紀』に、『土蜘蛛成敗』として、正確に書かれています。「勝ち組」である大和王朝は、「負け組」であるウガヤフキアエズ王朝の存在そのものを、歴史から抹消し始めました（推測）。だから『古事記』や『日本書紀』では、ウガヤフキアエズ天皇は一代で終わり、神武天皇が後を継いだことになっているのです。約 1000 年の歴史をパイパスして、いきなり「神代」と「神武天皇」をつなげてしまったため、あちこちで矛盾が発生しているというのが、私の解釈です。

◆ウエツフミには由緒正しい『底本』が存在した！



もうひとつは、『竹内文書』の影響が大きいと思います。私は、『竹内文書』は偽書だと決め付けているので、その内容を詳しくは読んでいません。問題は、戦前に竹内巨磨という人物が現れ、『上記（ウエツフミ）』などをベースに、これに自分の靈感で得た創作部分を付け加えて、宗教＝天津教の経典としてしまったことです。当時の「八紘一宇の精

神」(日本が世界の中心なので日本人は世界を統一すべきという思想)と結びついて、これに感化された信者が、軍人や官僚などにも広がり(2.26 事件を起こしたという説あり)、弾圧事件=裁判沙汰にまで発展しています。さらに、戦後になってからはGHQも解散命令を出しています。この天津教が経典のひとつとしていたのが『上記(ウエツフミ)』であり、天津教がオカルト的であったが故に、ウエツフミもオカルトだと決め付けられてしまったのです!つまり、誰も読んでいないのに「なんだか怪しい」というイメージが先行してしまったというのが事実であり、これによりわが国の古代史研究は大きく後退することとなります。これを、古田武彦は、小松左京(作家)との対談のなかで「不幸な分離」と表現しています。この霊山のふもとに、ウガヤフキアエズ王朝の首都「**大分の宮**」があった。

▼では、なぜ「実在した」と断定できるのか?

まず、「ウエツフミ」を素直に読むことです。そこに書かれた内容のボリュームと正確さには圧倒されます。仮にこれが「偽作」であったとしたならば、これを書き上げた人は一生の大半を創作活動にささげる必要があったでしょう。しかも何のために?手間ひまのかかる豊国文字を使って?神代文字で書かれていたことから、ほとんど読める人が居なかったということも大きいと思います。何が書かれているのかよく分からないので怪しい!と断定された可能性があります。その内容を読んでみると、万葉時代人にも似た底抜けの明るさと、古代人の鋭い生活の知恵、そしてあくまでも正確さにこだわった実証的な記述は、感動ものです。しかも、その編集には豊後の国の守護職を代々務めた大友氏の初代・大友能直が、直接かかわっているのです。というより、彼自身が自ら序文を書いて、署名しているのです。さらに、地名や人名の正確さです。

私自身がたまたまこの歴史書の舞台となった場所に精通していたため、彼らの行動が手に取るように蘇ってくるのです。人名に関しても、ざっと千人以上の神々の名前が記録されています。これからもっと、この書物が衆人に知れるところとなって、実在する考古学的な遺跡との一致が証明されてくることでしょう。

.....<続いて、参照><https://ugaya.jimdofree.com>.....

## ■中臣氏と藤原氏の関係

中臣氏(藤原氏)の祖は、飛騨王朝の大幹部天児屋命です。忌部氏の祖は、布刀玉命です。物部氏の祖は、饒速日命と、長スネ彦の妹の三炊屋媛の子の宇摩志摩遲命です。穂積氏、ウネベ氏の祖でもあります。大伴氏の祖は天忍日命、久米氏の祖は天久米命です。ちなみに蘇我氏の祖は少彦名=五十猛で新羅人です。蘇我氏は大国主が新羅女に孕ませた新羅人達の子孫です。用明天皇・皇后、馬子大臣、聖徳太子も皆新羅人が祖です。

▼藤原氏の祖先、中臣氏とは?

ニニギの命が天孫降臨したとき、下記の三神が重臣として付き添って天上界から降臨しています。(ウエツフミの記述によるものなので、記紀とは多少異なりますが.....)

◆**天之児屋櫛真智の命**.....アメノコヤネクシマチノミコト

右大臣コヤネ、別名タネコ(八咫鏡を守って政策立案を担当)⇒のちの中臣氏⇒藤原氏の祖先

◆**天之太玉神玉の命**.....アメノフトダマカムタマノミコト

左大臣フトダマ(八束の剣を守って軍事を担当)⇒のちの物部氏⇒蘇我氏に滅ぼされる

◆**常世之八心思金の命**.....トコヨノヤココロオモイカネノミコト

フトマニという占いを担当したオモイカネ⇒のちの忌部氏という説もあるが不明。

当初は、この三神も「二上りの大宮」(高千穂)の近くにあった「一つ岳の大宮」(場所不明)に住んでいましたが、ニニギが「大分の宮」に遷都するに伴って大分の地に引っ越してきました。その後、ここから全国にその子孫たちが広がってゆきます。**ウガヤフキアエズ王朝**では、その子孫たちが代々この三役を継承し、地方の国司なども務めているか

らです。

さらに、「ホツマツタエ」では「筑紫にいた天皇に（大分直入への）行幸をお願いしたところ（もう年なので）直入中臣氏（アメタネコと宇佐出身のウサツヒメとの間に生まれた子＝ウサマロ）を派遣し、直入物部氏（クシミカタマの子＝アクツクシネ）に、これを補佐するよう命じた」とあり、これが豊の国、直入の郡（現在の大分県竹田市）が成立した経緯であると書かれています。つまり、**中臣氏の一族は、九州大分の地から発祥しているのです。**

いずれにせよ、ニニギの命が祖母山に降臨した以上、本物の皇族や公家は全て九州から出ていることは間違いありません。このことを裏付けるかのように、中臣氏の古い家系図では「菅生氏」という一族が記録されており、これが竹田市菅生地区の知名になったと考えられます。また、前にも書きましたが、「直入中臣神社」と「直入物部神社」も存在します。ところが、この大分の地に居た、いわば本家・中臣氏は、景行天皇により滅ぼされます。

つまり、このときに**本家・中臣氏の血筋は、いったん断絶した可能性もあります。**

その後、中臣氏の名前が再び歴史に登場するのは、有名な**中臣鎌足が天智天皇から藤原姓を名乗ることを許されてから**です。その子の藤原不比等は、日本書紀を編纂したことで有名ですが、そこには下記のように説明されています。

「アメノコヤネが、神武天皇にお供して宇佐の地を訪れた際に、土地の国司の娘であったウサツヒメと結婚した。これが中臣氏の祖先である。」ウエツフミやホツマツタエの記述をもとに、神武天皇と無理やりつなげた可能性があります。初代・ニニギと一緒に天孫降臨したアメノコヤネが、その73代目にあたる神武天皇と一緒に行動したという話には、かなり無理があるからです。この頃から、藤原氏は中臣氏とは全く違う本性を発揮し始めます。

◆もともと戦は得意ではなかった中臣氏が、急に好戦的になって、次々とライバルたちを滅ぼしてゆきます。（冒頭にもあるように戦は物部氏の仕事でした）

◆本来の中臣氏であれば、ウガヤフキアエズ王朝の重臣であった訳ですから、ウガヤ王朝を擁護するはずですが、それと反対のことを行っています。

◆例えば、**藤原不比等が編纂した「日本書紀」には、ウガヤ王朝のことが全く書かれていません。**

◆信仰的にも「春日大社」や「鹿島神宮」を創建して、タケミカツチやフツヌシなどの戦の神々を信仰しはじめます。

※**新羅発祥の八幡神**は「春日宮は私の父である」とご託宣していますので、この頃の藤原氏＝新羅の работникという可能性もあります。

◆ウガヤ王朝の重臣の中臣氏であったならば、ニニギの命・海幸彦・山幸彦・豊玉姫・ウガヤフキアエズの命などを信仰するはずです。

以上の事実から、**中臣鎌足以降の藤原氏は、本家（九州）・中臣氏とは全く関係の無い、別の血筋である可能性**があります。だから、最近では「**藤原氏は帰化人である！**」という諸説があちこちから上がっているのです。私の考えでは、中臣鎌足はタイ・ベトナムあたりからやってきた「弥生人」ではないかと思えます。鹿を信仰する海洋民族・安曇氏との共通点が多いからです。つまり、**帰化人・中臣鎌足は、自分の出自を天皇家と繋げるために、無理やり中臣氏の子孫であることを捏造した。・・・とも考えられるのです。**このときに、「下がり藤」の家紋も一緒に拝借した？

もちろん、九州から発祥した「**本家・中臣氏**」も、藤原氏と名乗ったことから、歴史が複雑で分かりにくくなっているのです。例えば、鎌足の次男・不比等は「**本家である自分以外は藤原の性を名乗ってはならない**」と、意味不明のことを言い出します。つまり、あちこちでいろんな藤原氏が誕生しはじめて、「**本家だ！分家だ！**」との争いが生じたということでしょうか？

さらに、『宇佐神宮御宣託集』には、興味のある記録が残っています。716年、宮司の辛島氏が神殿を小山田の地に移転させたため、これに憤慨してか？大隈・日向連合軍が反乱を起こします。つまりウガヤ王朝の残党が蜂起した訳です。多分この反乱の結果、720年に藤原不比等が暗殺されてしまいます。（通説では病死）このあたりは正史には全く残っていませんが、中臣＝藤原の家柄を横取りした帰化人に対して、正統派からの報復があったのではないのでしょうか？

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ここまで参照・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

---

## <私見>九州王朝（概略）

BC130年頃、九州豊国から日向西都原を平定したのは、素戔嗚尊である。（⇒山下説）

その後、九州統治を向津姫（＝天照）と大穴牟遲尊に任せた。

天の忍穗耳尊は、正勝吾勝・勝速日という長い諡号が付いている。「勝」を3度続けているから余程、嬉しかったのだろう。いったい、誰に勝ったことがそんなに誇らしかったのか？

- ・素戔嗚は、饒速日尊を宇佐から河内へ船団（磐船）で東征させた。（＝天神降臨）
  - ・天照（向津姫）は、瓊瓊杵尊を日向（霧島）から薩摩へ使わせた。（＝天孫降臨）
- 饒速日東征後は、豊前を中臣氏、豊後を大伴氏が引き継いだ。

記紀では、狭野尊（磐余彦）は、鵜萱草葺不合尊の子である。

旧事紀では、勝速日の弟が熊楠日（＝鵜萱草葺不合尊）となっている。

大分王朝の74代目が神武（磐余彦）であれば、神武は伊弉諾や向津姫の直系ではなくなる。

- ・ウガヤ王朝の御祭神及び祖神は、誰なのか？（不明）
- ・ウガヤ王朝と伊弉諾尊とは、どのような関係にあったのか？（不明）

## <私見>純友の乱（概略）

-----<参照：中臣氏と藤原氏の関係>-----

男子系統が絶えた中臣氏を母に持つ純友は、大山祇の子孫の三島の越智氏に養子に出された。大きくなった純友は、勝手に「藤原」と名乗るようになった。というのは、中臣氏は藤原氏に改姓されていたから。

新居浜の役所に「氏姓」を届け出るため、父方の越智氏の系図と母方の中臣氏の系図を持って行ったが、偽物だと言われた。

純友と役所との諍いを聞きつけた朝廷（藤原氏）は、純友が「謀反」を起こしたと因縁を付け、鎮圧軍を送った。身に覚えのない純友は、抵抗するが勢力差により後退し、北九州に逃げた。

さらに、追捕使が来たため、宇和島まで船で逃げた。

そこで役人に捕まって、抗弁も許されず、処刑された。

それ以降、朝廷は「藤原氏と名乗ってよいのは、鎌足以降である」とお触れを出した。

藤原氏自らが中臣氏ではないと認めているようなものだ。

そもそも、神職である筈の中臣氏（の偽物）が、宮中で儀式の最中に時の政権の長に切りかかり、首を刎ねるなど（乙巳の変）、神職に非ざる暴挙である。神前を穢していると言ってもいい。

※歴史歪曲は改めなければならない。

---